日本研究教育年報　第 24 号
2020（令和 2）年 3 月
139－169 頁

Japanese Studies: Research and Education
Annual Report Vol. 24
March 2020, pp. 139-169

〈彙　報〉

彙報†
Miscellaneous News

日本研究教育年報. 2020, Vol.24, pp. 139-169. ISSN 2433-8923

2019 年度開講科目一覧
List of Courses 2019-2020

１．　世界教養プログラム

１－１．地域言語 A（言語文化学部）

授業科目		授業題目	担　当	単位
日本語Ⅱ	共通	文書資料講読（古典）	平原	日本人：10 留学生：10
		文章資料講読 I	柴田	
		対照言語学総論	風間	
		日本語語彙論入門／文字・表記論入門	早津	
	日本人	比較文化論	木村（春期）・嶽本（秋期）	
	留学生	口頭・文章表現Ⅱ	望月（春期）・小柳（秋期）	

１－２．地域言語 A（国際社会学部）

授業科目		授業題目	担　当	単位
日本語Ⅱ	共通	文章資料購読 I	柴田	日本人：8 留学生：10
		比較文化論	木村（春期）・嶽本（秋期）	
		地域社会研究史料講読	吉田（春期）・大久保（秋期）	
		日本語語彙論入門／文字・表記論入門	早津	
	留学生	口頭・文章表現Ⅱ	小柳（春期）・望月（秋期）	

† 本稿の著作権は著者が保持し，クリエイティブ・コモンズ表示 4.0 国際ライセンス（CC BY）下に提供します。https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/deed.ja

１－３．地域基礎科目（言語文化学部・国際社会学部）

授業科目	授　業　題　目	開講学期	単位	担当
地域基礎 1A（日本 2）	An introduction to Japanese politics: a social scientific view of historical facts	春期	2	春名
地域基礎 2A（日本 1）	近現代日本史「知識」の批判的分析	春期	2	木村

２．　専修プログラム

＊この他、各教員の担当する卒業論文演習・卒業研究演習（各 4 単位）あり。

2−1．言語・情報コース（言語文化学部）

授業科目	区分	授　業　題　目	開講学期	単位	担当
言語研究入門	講義	おもしろいぞ言語学・世界言語編 A	春期	2	風間
	講義	おもしろいぞ言語学・世界言語編 B	秋期	2	風間
言語学概論	講義	おもしろいぞ言語学・日本語諸方言編 A	春期	2	風間
日本言語研究概論	講義	日英対照：形態論・統語論・意味論入門	春期	2	望月
	講義	日英語対照：　英語で説明する日本語文法	秋期	2	望月
	講義	おもしろいぞ言語学・日本語諸方言編 B	秋期	2	風間
日本言語研究	講義	現代日本語の語彙と文法	春期	2	早津
	講義	現代日本語の語彙と文法	秋期	2	早津
	演習	日本語史の諸問題 1	春期	2	川村
	演習	日本語史の諸問題 2	秋期	2	川村
	演習	文法と語彙	春期	2	早津
	演習	文法と語彙	秋期	2	早津
	演習	言語教育のための日英語対照研究と言語理論 I	春期	2	望月
	演習	言語教育のための日英語対照研究と言語理論 II	秋期	2	望月
言語学特殊研究	講義	おもしろいぞ言語学・感動編 A	春期	2	風間
	講義	おもしろいぞ言語学・感動編 B	秋期	2	風間
	演習	言語学演習	春期	2	風間
	演習	言語学演習	秋期	2	風間

2－2．グローバルコミュニケーションコース（言語文化学部）

授業科目	区分	授　業　題　目	開講学期	単位	担当
グローバルコミュニケーション研究入門	講義	Introduction to Japanese Language Education in the Era of Globalization	秋期	2	櫻井
日本語教育学概論	講義	日本語教授法	春期	2	ツォイ
	講義	日本語教育のための音声トレーニング	春期	2	阿部
日本語教育学研究	講義	日本語の第二言語習得論入門 1	春期	2	海野
	講義	日本語の第二言語習得論入門 2	秋期	2	海野
	講義	日本語教育のための音声教育実践	春期	2	阿部
	講義	語用論、談話分析	秋期	2	小柳
	演習	語用論と日本語教育 1	春期	2	谷口
	演習	語用論と日本語教育 2	秋期	2	谷口
	演習	日本語教育学演習 1（量的研究）	春期	2	阿部
	演習	日本語教育学演習 2（質的研究）	秋期	2	阿部
	演習	日本語の第二言語習得演習 1	春期	2	海野
	演習	日本語の第二言語習得演習 2	秋期	2	海野

2－3．総合文化コース（言語文化学部）

授業科目	区分	授　業　題　目	開講学期	単位	担当
日本文化研究	講義	恋愛と日本文学	春期	2	柴田
	講義	Modern and Contemporary Japanese Literature 1	春期	2	セン
	講義	Modern and Contemporary Japanese Literature 2	秋期	2	セン
	講義	物語と絵	春期	2	伊東
	講義	（題目なし）	秋期	2	ハウカンプ
	演習	（題目なし）	春期	2	ハウカンプ
	演習	（題目なし）	秋期	2	ハウカンプ
	演習	近代文学演習	春期	2	柴田
	演習	近代文学演習	秋期	2	柴田
	演習	日本古典文学 1	春期	2	村尾
	演習	日本古典文学 2	秋期	2	村尾

２－４．地域社会研究コース（国際社会学部）

授業科目	区分	授　業　題　目	開講学期	単位	担当
日本地域研究	講義	日本近世・近代都市社会史	春期	2	ポーター
	講義	19 世紀日本における貧民の救済と統制	秋期	2	ポーター
	講義	民衆史Ⅰ　マイノリティスタディーズ	春期	2	友常
	講義	民衆史Ⅱ　宗教と芸能	秋期	2	友常
	講義	日本の歴史	春期	2	吉田
	講義	近代日本思想とアジア	秋期	2	米谷
	講義	The Allied Occupation of Japan	春期	2	木村
	講義	Diplomatic Relations of Postwar Japan	秋期	2	木村
	講義	日本の古文書を読む	秋期	2	滝口
	演習	19 世紀日本における都市貧困の社会史	春期	2	ポーター
	演習	19 世紀大坂＝大阪の都市社会史	秋期	2	ポーター
	演習	日本の伝統社会を考える	春期	2	吉田
	演習	近代日本社会とマイノリティⅠ	春期	2	米谷
	演習	近代日本社会とマイノリティⅡ	秋期	2	米谷
	演習	地域社会と差別、性 1	春期	2	友常
	演習	地域社会と差別、性 2	秋期	2	友常
	演習	日本近世史研究と史料	秋期	2	佐藤

2019 年度修士論文・修士研究題目

List of M.A. Theses/Projects 2019-2020

大学院総合国際学研究科　博士前期課程

氏　名	指導教員	論　文　題　目	備考
世界言語社会専攻　言語文化コース			
エンフアムガランオノン	風　間	現代モンゴル語の相互表現	＊
ナムダグハグバジャブ	風　間	モンゴル語ハルハ方言における接尾辞 -jA の意味機能について: コーパスに基づく研究	＊
パトリシオ　バレラアルミロン	風　間	パピアメント語におけるテンス・アスペクト	＊
渡　邉　萌	風　間	現代アイスランド語における叙述所有－無生物所有者の現れる例を中心に	＊
世界言語文化専攻　国際社会コース			
范　体　会	吉　田	江戸時代における日本人の西洋文化受容について―蘭学者渡辺崋山を中心として―	＊
国際日本専攻　国際日本コース			
今田　詩衣香	阿　部	日韓国際結婚家庭の言語使用の様相―談話分析とインタビューによるケーススタディから―	＊
小山　多三代	阿　部	計画的行動理論を援用した日本語学習意欲の長期変容プロセスの解明―日本国内のバングラデシュ IT 人材に対する学習行動促進の支援策の検討―	＊
陳　小　麗	阿　部	中国人日本語学習者の発音習得ビリーフとストラテジー―留学経験有りと留学経験無しの学習者を中心に―	＊
金　琳	川　村	書き言葉における日中非情物主語受身文	＊
呉　詩　卉	川　村	受身表現に相当する機能動詞文について	＊
周　源	川　村	話し言葉における受身文の日中対照研究―受動者と動作主をめぐる考察―	＊
王　夢　渓	柴　田	幸田露伴の作品に潜んでいる反抗	＊
張　一　弛	柴　田	「突き放す」ものを再考する	＊
チョウ　ウロ	柴　田	大江健三郎文学における障害児の表象について	＊
タイ　イエツ	柴　田	村上春樹作品における「小人」という表象の系譜	＊
本間　笑子	柴　田	三島由紀夫文学における「政治と恋愛」　―「鹿鳴館」と『宴のあと』を通して―	＊

李　　雨　　珊	早　　津	中国の日本語専攻用教科書『総合日本語』におけるオノマトペの一考察 ―日本語教育の観点から構文的特徴と意味的特徴を分析する―	＊
張　　念　　曦	村　　尾	大伴家持における恋歌と漢詩の対比研究	＊
ヨ　　コ　ウ　ナ　ン	村　　尾	狐婚姻譚の研究――信太妻ものの主題の変遷をめぐって	＊

＊については、p. 145 以降に修士論文要旨を掲載

2019 年度修士論文・修士研究要旨
Abstracts of M.A. Theses / Projects 2019-2020

エンフアムガラン　オノン　　「現代モンゴル語の相互表現」

本稿では、現代モンゴル語の相互や協同の意味を表す相互態接尾辞と協同態接尾辞を研究し、さらに相互の意味を持つ相互代名詞 bije bije- との関係性や、意味、共起について記述する。

現代モンゴル語の相互性の意味分類に関して、特徴としては言語学における相互性の意味分類に一致し、さらに現代モンゴル語の特徴として、動物のみに用いる動詞、音を表す動詞、連鎖関係を表す動詞、人間の人体の動作を表す動詞などいくつか特徴が見られた。この意味分類を行ったことで、現代モンゴル語の相互態接尾辞と協同態接尾辞の特徴及び機能を知ることができたと考えられる。相互態接尾辞は人間と動物の動作、音、人間の身体部位、連鎖関係、戦いの意味を表す動詞に接尾し、協同態接尾は人間のみの動作、人間の考えや思想、戦いの意味を表す動詞に接尾し連鎖関係の意味を表す動詞に接尾しない傾向があることが分かった。

ナムダグ　ハグバジャブ　　「モンゴル語ハルハ方言における接尾辞 −jA の意味機能について：コーパスに基づく研究」

本稿は現代モンゴル語ハルハ方言における -jA 接尾辞の意味機能をコーパスに基づいて明らかにすることを目的とする。まず、コーパス検索の際には、*jA といった形で検索し、用例を抽出する。そのうち、-jA を語尾とする名詞はリストから除外し、データを作成する。次に、調査として人称代名詞と共起する例を手作業で収集し、人称代名詞の出現頻度を調べ、結果に基づいて人称制限があるかいなかを確認することができた。最後に、否定形式と共起することは可能かを明らかにすることに焦点を当てて分析した。コーパスからの用例の分析において生じた問題に対して、コーパス調査を確認し、補うために母語話者を対象したアンケート調査を行った。

アンケート調査で得られた結果によると、-jA は否定副詞と共起することが可能であるが、動詞に関してやや制限があるのではないかと感じられた。しかし、否定副詞以外に否定と共起する方法があるということが分かった。

パトリシオ　バレラ　アルミロン　「パピアメント語におけるテンス・アスペクト」

パピアメント語には、動詞に先行して、TAM（テンス、アスペクト、モダリティ）を表す標識（ta, a, tabata, lo）が存在する。しかし、パピアメント語の変種によって ta と a の機能がことなり、下層方言（basilect）においては未完了のアスペクトのみを表すという主張がある。本研究は口語と文語における TAM 標識の選択の違いに着目した。その違いを見るために 5 つの調査を行った。それらは進行相を表す機能における口語と文語における ta の用法の違いに着目した 2 つの調査、ta と a の共起制限に関する 2 つの調査、"ta"という形式の複数の機能に関する 1 つの調査である。最後の調査から"ta"という形式にはコピュラ動詞、焦点標識、TAM 標識の 3 つの機能があり、それらの機能の線引きが難しい場合があることが分かった。これらの調査から、TAM 標識の ta と a が口語においても文語においてもアスペクトのみを表すと結論付けられる。

渡邉　萌（ワタナベ　モエ）　「現代アイスランド語における叙述所有－無生物所有者の現れる例を中心に」

現代アイスランド語の叙述所有の表現として、eiga ‘own’, hafa ‘have’, vera með ‘be with’ の 3 つがある。それぞれの形式について、有生物所有者についての研究が主で、無生物所有者についてはほとんど議論されて来なかった。本稿は、現代アイスランド語の叙述所有に関して無生物所有者に関するデータを示して有生物所有者の場合と比較し、最終的には現代アイスランド語の叙述所有の総体を記述することが目的である。本稿では 2 つのコーパス調査と、1 つのアンケート調査を行った。最初のコーパス調査では、無生物所有者の現れる所有表現がどのくらいの数、どのようなものが現れるのか調べた。次のコーパス調査では被所有者が具体物の場合に注目し、調査 1 の追調査を行った。3 ではアンケート調査を行い、vera með (ACC) / vera með (DAT) に関して方言差が関係している可能性について調査した。

范　体会（ハン　タイカイ）　「江戸時代における日本人の西洋文化受容について—蘭学者渡辺崋山を中心として—」

本稿では、三河田原藩家老であり、また江戸蘭学者の元締である渡辺崋山に注目し、十九世紀前半における知識人の西洋文化受容のあり方を考察した。具体的には、渡辺崋山の蘭学研究の動機や研究意識が変化していたことを明らかにした。多くの先行研究では、崋山が年寄役末席に起用され、海岸掛を兼務した天保三年（一八三二）に、本格的な蘭学研究を始め、直接の動機は海防であったと指摘されている。それに対して、田中弘之は崋山の蘭学研究の動機が「海防」だけではないと、その通説に疑問を提起した。しかし、具体的なその他の動機について指摘していない。本稿では渡辺崋山の蘭学研究と関連する史料を一部利用し丁寧に分析し、崋山の蘭学に対する関心と開始時期、また研究意識の変化を考察していった。

史料分析を通じ、最初は他の蘭学者の影響をうけて、海防を兼務とする職責のため、蘭学を研究していきたが、のちに、研究を進展させつつ、対外情勢の緊迫感が崋山の危機意識を高め、西洋知識の先進性を学ぶことで幕府を批判することに転化してきた、と考える。

今田　詩衣香（イマダ　シイカ）　「日韓国際結婚家庭の言語使用の様相—談話分析とインタビューによるケーススタディから—」

本研究は、日本における日韓国際結婚家庭を対象に、談話データの分析と半構造化インタビューにより夫婦間の言語使用の様相および国際結婚家庭が抱えうるコミュニケーション上の問題点を把握することで、多文化家庭の支援へ還元することを目的としている。談話分析では、外国人配偶者に配慮した言い換えや補足、卓立・強調のためのコード・スイッチングなど、各家庭で国際結婚ならではの言語行動が観察された。一方で、インタビューの分析からは、現存の多文化家庭支援を受けることへの抵抗感や、現状として夫婦間のコミュニケーションに支障がなくても潜在的な不満があること、親族付き合いの中で配偶者の母語の習得が求められることなどがわかった。これらの結果からは、単に今ある多文化家庭支援の制度を拡充するだけでなく、国際結婚同士の横のつながりを生かしたコミュニティの場を提供・援助するといった、新たな支援制度の必要性が明らかになった。

小山　多三代（コヤマ　タミヨ）　「計画的行動理論を援用した日本語学習意欲の長期変容プロセスの解明―日本国内のバングラデシュ IT 人材に対する学習行動促進の支援策の検討―」

本研究は、日本語学習意欲の変容プロセスを明らかにすることにより、学習意欲を学習行動に結びつけるうえでどのような支援が求められるのか検討することを目的とする。バングラデシュ IT 人材 3 名に半構造化インタビューを実施した結果、学習意欲の向上・維持および減退に最も大きな影響を与えるのは、日本語学習の必要性・不必要性に対する認識であり、その認識は生活環境自体よりも、職場環境における相互作用や将来展望によって左右されることが分かった。また、状況的にも能力的にも日本語を学習することが難しいという認識が、学習意欲の減退要因だけでなく、学習行動の阻害要因としても作用していることが明らかになった。学習意欲を学習行動に結びつけるうえでは、企業側の支援として、業務時間内での学習時間の確保が求められ、教師側の支援として、学習者の状況や事情に合わせて学習を継続できる方法を柔軟に示していくことが重要であると示唆された。

陳　小麗（チン　ショウレイ）　「中国人日本語学習者の発音習得ビリーフとストラテジー―留学経験有りと留学経験無しの学習者を中心に―」

本研究は日本語学習者の発音習得ビリーフと学習ストラテジーの留学経験の有無による違いを明らかにするにことにより、日本語の発音学習を促進させるための提案をすることを目的とする。中国人日本語学習者 111 名（そのうち留学経験有り 94 名、留学経験なし 17 名）にアンケート調査と半構造化インタビューを実施した結果、留学経験の有無により、そのビリーフとストラテジーの使用が違い、留学経験無しの学習者のほうが日本語の発音の悪さのデメリットを強く感じており、発音学習ストラテジーの使用には教師への依存性が高いことが分かった。また，ビリーフとストラテジー使用に相関があることも分かった。さらに，留学経験有りの学習者のほうが経験無しの学習者より日本語の発音の流暢さが優れていることも示唆された。積極的な学習ビリーフを持ち、積極的に学習ストラテジーを利用したら、日本語の発音もそれなりに流暢になるということが言えるであろう。

金　琳（キン　リン）　「書き言葉における日中非情物主語受身文」

日本語の受身文は、近世以前には非情物が主語に立つ受身文がほとんどなく、わずかに見られる例も非常に限られていることがすでに分かっている。近代以降、欧文翻訳の影響で非情物主語の受身文が急速に広まったと考えられる。一方、中国語の非情物主語受身文は、近代に至って発達したのではないが、現代中国語の非情物受身文の使用頻度は古代語より高く、受身文全体における主語の「生命度」が下がっているという傾向が見られる。本論文は、パイロット調査を通じて、書き言葉における日本語と中国語にどのような受身構文が使われているかを明らかにした上で、非情物主語受身文のうち、従来あまり取り上げられていないトピックに着目する。具体的には次の 4 つの受身構文を中心に検討した。

① 日本語の「によって」受身文と中国語の「由」字受身文との対応関係
② 日本語と中国語のいわゆる「迂言的受身文」との対照
③ 日中両言語における引用節で「内容」を表わす受身文
④ 現代中国語「为」字受身文と対応する日本語の受身文

呉　詩卉（ゴ　シキ）　　「受身表現に相当する機能動詞文について」

従来日本語の受身表現の考察は形態論と統語論（動詞の形式や名詞の格形式）の面から多くなされているが、日本語には形態的に動詞レル・ラレル形を持たない受身表現も存在している。たとえば、「太郎が花子からさそいをうけた」があげられる。この例では、主語の「太郎」はさそいの受け手で、カラ格の「花子」は行為者である。そして、「さそいをうけた」という語結合の中では、「うける」の語彙的な意味は希薄で、「さそい」が動作概念を表す。このような場合の「うける」を「機能動詞」と呼び、「さそいをうけた」全体を「受身表現相当の機能動詞結合」と呼ぶ。本研究は生産性が高い動詞「うける、える、あつめる、あびる」の四語を選定したうえで、○1 名詞部分を共有する複合サ変動詞レル・ラレル形と交替可能か否か○2 機能動詞と共起する名詞の特徴○3 機能動詞による受身表現の主語の種類（有情/非情）○4 受身以外の文法機能の兼務四つの観点から受身表現に相当する機能動詞文について考察する。

周　源（シュウ　ゲン）　「話し言葉における受身文の日中対照研究―受動者と動作主をめぐる考察―」

本研究は、2007 年～2012 年に放送された日本のテレビドラマ 7 作品と、1987 年～2008 年に放送された中国のテレビドラマ 21 作品及び 1996 年～2005 年に出版された『夏衍映画文学賞受賞シナリオ集（第一集～第六集）』に収録された 21 作品の中から、日本語と中国語の話し言葉における受身文をそれぞれ 791 例抽出し、量的調査と質的考察を行った。抽出された受身文の主語名詞と動作主名詞を「ヒト」「モノ」「コト」「組織」「カラダ」「心力」などという 11 種類に分類した結果、話し言葉においては、日本語も中国語も「ヒト」主語の受身文が用例の大半（日本語は 64.5%、中国語は 75.6%）を占めていることが判明した。そして両言語とも有情者主語受身文の占める割合は、書き言葉に比べて話し言葉のほうが圧倒的に多いことが分かった。また、動作主に関しては、両言語とも文中に表示しない傾向があり、特に日本語では、動作主無表示のものが 8 割近くを占めており、むしろ動作主を表示しない方がデフォルトであると言えよう。

王 夢渓（オウ ムケイ）　「幸田露伴の作品に潜んでいる反抗」

露伴初期の小説から見れば、描かれた主人公は果たして善玉悪玉の区別が甚だしく、さらにほとんど壮烈な意識におけて男性であり、出世など行動で男として生まれた甲斐を実現したいという志向が現れた物語なのか、という視点から露伴の作品を再考した。
序論において、露伴の生涯と作品を紹介し、作品の制作順に従って露伴の前期、中期、後期に分け、それぞれ確立時代、成熟時代と転向時代に対応させた。『風流仏』から出発し、評論、随筆などを併せて、前期の作品を解読する。

本論は三章から構成されている。第一章では、『風流仏』に注目し、一見に主人公を東西洋という対立図式においた芸術至上主義小説だが、完全的に教訓小説と言い難い。第二章では、露伴は「地獄谷書簡」においてそれまでの作品を否定することを発端とし、『一口剣』について研究した。さらに、円熟していた露伴は現実世界と創作との矛盾を深刻に受け止めて、現実と作品を繋いで『五重塔』では顕在された世界をモデルとして獲得する--恋情不在の世界が形成されるのである。以上は第三章の概略である。

結論では、同時の明治社会が欧米から入ってきた輸入の近代化をどう消化するかという課題に直面したのに対して、ある程度に『風流仏』から『五重塔』までは治世への試論をしていた、という手がかりを明らかにした。

タイ　イエツ　　「村上春樹作品における「小人」という表象の系譜」

村上春樹作品に相似する特徴を持つ「小人的な存在」は多数登場している。これらの存在は外見的には人間の縮小コピーのようで、人の思想や感情を操れる力を持ち、個人の主体性を奪い取ろうとし、特殊な手段を借りなければ日常生活では普通の人は「小人的な存在」を視認されない。

村上作品における「小人的な存在」という表象の裏にあるものは、時代が変わるにつれて大まかに三つ段階に分けられる。一つ目は 80 年代の情報社会で、膨大な情報を前にして個人がいかに小さな存在で、その思考回路を変えられる様相が描かれている。二番目は村上が地下鉄サリン事件と阪神・淡路大震災から大きな影響を受けたあとに創作した『1Q84』に登場する「リトル・ピープル」である。三つ目はエレサレム賞の受賞スピーチが発表された後に創作された『騎士団長殺し』における「イデア」で、「イデア」は徹底とした中立な存在となり、自身の中に暴力性を育んでいる個人は傷つけられる一方ではなく、他人の主体性を殺そうとする暴力の主体ともなりうる可能性を掲示している。

村上の世界観では「精神的囲み」を作り出した主体は時代によって変わるが、その根底にあるものは共通で、美しい言葉や観念で作られた「精神的な囲み」に、個人が自分の主体性の一部をそれに預ければ、個人を傷つく暴力を生成することである。

張　一弛（チョウ　イチシ）　　「「突き放す」ものを再考する」

本論は坂口安吾の文学論、「文学のふるさと」における「突き放す」という概念を取り上げ、まずこの概念の意味と用法を「文学のふるさと」の文脈において確認し、この概念がなぜ従来の研究で重要視された「ふるさと」と「孤独」という概念より抽象性の高いものであるかを検討する。つまり、「突き放す」という概念は「このようにして『突き放す』ことができる」という「予定」をも「突き放せる」ものである。そのため、坂口安吾の作品において、「突き放す」という所作が一つの象徴に定着せず、作品毎に動態的に変化するものであるということが分かる。この分析を通して、「突き放す」を「文学のふるさと」という文学論における中心概念として位置付ける。また、本論は「突き放す」という所作が坂口安吾の各作品で、如何に表現されているかについて具体的な考察を行うために、「突き放す」主体、「突き放される」客体を作品の内容から浮かび上がらせる。

チョウ　ウロ　　「大江健三郎文学における障害児の表象について」

本論では 1964 年に発表された『空の怪物アグイー』から、1990 年の『静かな生活』まで、大江の作品に登場した障害児の人物像を分析してみた。第一章では、『飼育』、『死者の奢り』、『人間の羊』を通して、初期作品において「監禁状態」を論じてみた。第二章では、「障害児主題」の登場を分析し始めた。『空の怪物アグイー』と『個人的な体験』という二つの作品で、作家が人生における選択の意味を極めて鮮明に描き分けていた。『万延元年のフットボール』では主人公の蜜三郎は障害児とともに生きることを通して、個人の「再生」を実現した。第三章では、『新しい人よ眼ざめよ』に描かれた障害児像を論じてみた。第四章では、障害を受容することを分析してみた。小説『静かな生活』に、主人公のマーちゃんは障害を持っている兄との関係を通して、自分自身も「心の病」から回復していくことが明らかにした。

本間　笑子（ホンマ　ショウコ）　「三島由紀夫文学における「政治と恋愛」　―「鹿鳴館」と『宴のあと』を通して―」

三島由紀夫作品における「政治と恋愛」というテーマに着目し、政治と恋愛の二つを取

り扱った作品として「鹿鳴館」と『宴のあと』を採り上げて考察した。「鹿鳴館」では人を騙し、利用する技術的な政治が影山伯爵を通して描かれており、一方で恋愛に通じている人物として朝子が配置されている。両者を通して描かれる政治と恋愛は互いに不可侵なものであり、互いの世界への侵犯は相手の怒りや拒絶をもたらす。「鹿鳴館」における政治と恋愛は、二つの世界が過度に接触することの悲劇が描かれていることがわかった。『宴のあと』では政治に対する心情、情熱に焦点を当てて描かれている。政治的情熱はかづを通して描かれているが、そうした政治的情熱は活力の欠けた現状を打破しようとする衝動によって支えられている。作中の政治はさらに人の本質を明らかにする作用があり、その作用の結果として政治行為が恋愛の破綻を招くように描かれていることがわかった。両作品においては政治と恋愛が接触することによる悲劇が描かれていると考察した。

李　雨珊（リ　ウサン）　　「中国の日本語専攻用教科書『総合日本語』におけるオノマトペの一考察　―日本語教育の観点から構文的特徴と意味的特徴を分析する―」

オノマトペは日本語において、重要な位置を占めているにもかかわらず、外国人学習者にとって習得は決して易しくない。そこで、本研究は中国の大学の日本語専攻用教科書『総合日本語改訂版 1–4』におけるオノマトペについて、構文的特徴（オノマトペと共起する動詞）と意味的特徴（カテゴリカルな意味など）を分析した。構文的特徴を分析するとき、日本語のコーパスを利用し、調査対象であるオノマトペについて、日本語母語話者の使用実態を明らかにし、教科書の説明とコーパスの用例を比較し、分析した。その結果、教科書の解説は比較的揃っているものもあったが、教科書の解説とコーパスの使用実態との間に、ズレのあるところもあることがわかった。そして、考察の部分では、教科書の解説とコーパスの使用実態との間に、ズレのある実態とズレが生じる理由を分析し、改善策を検討した。また、教科書に見られた類義語であるオノマトペについて、教科書には解説が示されていなかったため、改善策も検討した。

張　念曦（チョウ　ネンシ）　　「大伴家持における恋歌と漢詩の対比研究」

大伴家持の先行論によく見られるキーワードは「類型」と「模倣」であるが、筆者は大伴家持の歌は質が非常に高く、とても魅力的だと考えている。恋歌において、漢詩との対比研究を通して家持の歌の特質を探求することを本論文の目標とし、同じ主題の家持の和歌と漢詩を選出し、読み比べながら感情の表し方・恋愛思想・家持の独特なセンスと感受性・作歌意識・編集意識などに注目し、三つの主題に分けて対比分析する。最初は家持の「亡妾悲傷歌」と『詩経』の悼亡歌及び西晋詩人潘岳の「悼亡詩」三首を挙げて分析する。第二に、夫婦間の恋愛歌について、中国最古の男女連句詩「與妻李夫人連句詩」と秦嘉夫婦の贈答詩をあげ、家持と妻大嬢の相聞歌と対比してみる。最後に、戯れの恋歌について述べる。漢詩の戯れの歌は、殆ど妓女などをよむ詩である一方、家持が叔母の坂上郎女や紀郎女などの女性との相聞戯れ歌を交わすことによって、己の恋歌を詠む技術・能力を成熟させていた。

ヨ　コウナン　　「狐婚姻譚の研究――信太妻ものの主題の変遷をめぐって」

狐は神様や化け物といった人間を超越した存在として、日本の文学作品によく登場する。その中、名高い陰陽師である安倍晴明の狐母葛の葉が一番世間に知られる。信太妻ものは、『簠簋抄』をはじめ、『安倍晴明物語』と『しのだづま』を経て、『芦屋道満大内鑑』に至って定着する。『芦屋道満大内鑑』以前の作品を見てみると、物語は基本的に安倍晴

明をめぐって展開している。その安倍晴明に関する一連の作品の中、狐母葛の葉は脇役から主役へと変身する華麗なる場面が伺える。元々安倍晴明に依存した名もない狐母は、後世に有名な葛の葉に変身しいく。その変化の過程の中に潜んだ影響関係や作者の心理などの分析は、先行研究の中では依然として足りなかった。本論文では、章に従い、信太妻ものの主題の変遷を注目し、具体的な分析によって、これらの作品の発生、影響関係などを解明することに試みた。

2019 年度卒業論文・卒業研究題目

List of B.A. Theses/Projects 2019-2020

氏　名	指 導 教 員	論　文　題　目	備　考
言語文化学部　言語・情報コース			
新井　みぎわ	風間　伸次郎	ポーランド語の非意図的状態構文―語順にみる特徴―	*ポーランド語
市 野　沙 歩	風間　伸次郎	現代イギリス英語の HAVE と HAVE got について	*中国語
岩 崎　航	風間　伸次郎	ウルドゥー語における未来表現について	*ウルドゥー語
菊 地　香 穂	風間　伸次郎	ウズベク語における相互態を表すとされる接辞 -(i)sh について	*ロシア語
下 條　実 紘	風間　伸次郎	アラビア語カイロ方言における可能表現	*アラビア語
小 林　紗 佳	風間　伸次郎	現代英語の接尾辞-ish の用法の拡大について	*英語
齊 藤　潤 一	風間　伸次郎	ロシア語所有表現 UUK 構文の選択要因について	*ロシア語
斉 藤　弘 樹	風間　伸次郎	チェコ語名詞と日本語名詞の指小辞の対照研究	*チェコ語
タ　イ ジャティエン	風間　伸次郎	マレーシアにおける口語中国語の語気助詞について	*
田 村　絵 里 香	風間　伸次郎	イタリア語における受動態の助動詞選択について	*イタリア語
張　元 宗	風間　伸次郎	ポラ語における漢語借用語の声調について	*
中 村　夏 樹	風間　伸次郎	ポーランド語の未来表現における動詞分類と体選択の相関	*ポーランド語
早 坂　圭 太	風間　伸次郎	ケチュア語クスコ方言の動詞派生接尾辞 -yku、-rqu について	*スペイン語
森 本　瑠	風間　伸次郎	文語アラビア語 1 形動詞第 2 語根の母音選択について	*アラビア語
弓 削　諒 太	風間　伸次郎	英語とスペイン語の冠詞の対照研究	*スペイン語
ライ　リエイ	風間　伸次郎	ウズベク語の名詞句従属部における属格の出現／非出現	*
青 山　紘 大	川 村　大	明治初年～30 年代の「です」とそれに上接する語の様相について	*
魏　達 銘	早津　恵美子	漫画における日本語の命令・依頼表現の実態について	*
鄭　成 南	早津　恵美子	朝鮮語母語話者の条件表現「と」の使用実態について –日本在住の朝鮮語母語話者を中心に–	*
田　嘉 誠	早津　恵美子	副詞をとりたてる場合の助詞「は」の機能について	*
中 野　僚 満	早津　恵美子	今後の日本における漢字使用	*ポーランド語
南　菲	早津　恵美子	日本映画のタイトルの中国語訳語について	*
及 川　結	望 月　圭 子	ロシア語接頭辞付動詞の日本語訳出方法の研究 –接頭辞 при-/pri-・y-/u-が付いた場合–	*ロシア語
呉　少 晗	望 月　圭 子	中国語補語“ - 上”の新たな分類視角：統語的能格性の有無に基づいて	*

小松原　千明	望 月　圭 子	日本語母語話者の中国語結果補語「到」の誤用と習得について	*中国語
霜 鳥　加 奈	望 月　圭 子	ICT を用いた高大連携オンライン英会話プロジェクトにみる CEFR-J の各レベルとの対照 ―各映像データと CEFR-J から―	*中国語
高 崎　友 希	望 月　圭 子	中国語結果補語の習得 ―日本語母語学習者コーパスに基づく分析―	*中国語
陳　佳 惠	望 月　圭 子	日本語の「ている」表現から見るリトアニア語の対応表現	*ロシア語
山 本　結 菜	望 月　圭 子	ICT による高校生英語スピーキングの研究 －認知的・非認知的能力の成長－	*中国語

言語文化学部　グローバルコミュニケーションコース			
辻 内　康 輔	阿 部　新	中学校数学科教科書リライト教材の作成	*
長谷川　聡美	阿 部　新	日本語母語話者と日本語学習者のぼかし表現「とか」の使用実態分析	*
赤 名　梨 奈	海 野　多 枝	日本語学習とアニメを中心とした日本のメディアとの関係について	
井 上　悠	海 野　多 枝	雑誌『日本語教育』の中の中国語母語話者	
カシパール ダーリヤ	海 野　多 枝	Language use and student perspectives on SLA in a multilingual study abroad context	
キム　ハリム	海 野　多 枝	ライフストーリー・インタビューを通して見る日韓バイリンガルのアイデンティティ形成と言語と環境の影響について	
栗木　ゆかり	海 野　多 枝	生教材を使って日本語を学者した広東語母語話者のチャットアプリにおける誤用と言語使用について	朝鮮語
近 藤　悦 子	海 野　多 枝	Vocabulary for Intermediate Learners of Japanese: An Analysis of Vocabulary in Japanese Language Textbooks	*
酒 井　桃	海 野　多 枝	学習リソースとしての日本のアニメーション ―韓国語を母語とする日本語学習者の場合―	朝鮮語
宍 倉　早 紀	海 野　多 枝	複言語使用者の言語使用の実態 ―中国語を第三言語とする日英バイリンガルの例―	
直 井　悠 香	海 野　多 枝	多言語学習者の日本語学習ビリーフ： 中国語を母語とする多言語学習者の事例から	*フランス語
原 口　夏 海	海 野　多 枝	小学校での多義語の指導法提案 ―多義語の導入としての‘Have’―	*ウルドゥー語

春山　知里	海野　多枝	フィンランド人日本語学習者の学習動機 ―変化の過程とその要因について―	*
林アラン正人	海野　多枝	ポルトガル語を母語とする日本語学習者の日本語の分節音とアクセントの誤用に関する研究	*

言語文化学部　総合文化コース			
石井　温子	柴田　勝二	小説・水底に弧悲て 細川忠興	*イタリア語
久保　理紗子	柴田　勝二	福永武彦『忘却の河』と『死の島』における小説形式	*
シム　ハヌリ	柴田　勝二	小説・あなたのカケラ	*
鈴木　陽子	柴田　勝二	詩集・四季	*
田中　達也	柴田　勝二	詩集・いつかの君へ	*ドイツ語
星川　日向子	柴田　勝二	歌集・クリップ	*チェコ語
土田　杏奈	村尾　誠一	『万葉集』の恋歌における諸相について	*朝鮮語
谷川　蘭	村尾　誠一	源実朝『金槐和歌集』の研究―編纂の目的とその過程―	*ロシア語
国際社会学部　地域社会研究コース			
榎本　万澄	吉田　ゆりこ	上尾地域の紅花栽培に対する商人指導の重要性―菜種栽培との比較を通して―	*イタリア語
切明　優里香	吉田　ゆり子	土豪と地域社会―信濃国更級郡大塚村町田家を事例として―	*
小池　晴華	吉田　ゆり子	大正・昭和期における茨城県南部地域の茶生産―北相馬郡取手市下高井町広瀬家を素材として	*
小島　梨未	吉田　ゆり子	千宗旦一畳半茶室「不審庵」―今はなき姿の解明と復元―	*ロシア語
杉本　有輝	吉田　ゆり子	八田嘉右衛門の経済活動―松代藩との関係に注目して―	*
重松　朝妃	吉田　ゆり子	明治維新期における四国遍路の停滞に関する一考察	*ドイツ語
谷　始央理	吉田　ゆり子	一田庄七郎の籠細工興行からみる近世後期の見世物の興隆と魅力	*朝鮮語
水谷　泰士	吉田　ゆり子	江戸の美意識と悪意－山東京伝の黄表紙を素材として―	*英語
三井　理紗子	吉田　ゆり子	女性の美徳―福沢諭吉の女性観を中心に―	*
吉田　瀬奈	吉田　ゆり子	絵双六に見る女性像―史料としての双六の有用性の検討	*
久保　志哉	米谷　匡史	賢母良妻主義にみる植民地期朝鮮のジェンダー規範―女子教育の要求とその限界	*朝鮮語
黄　嵐東	米谷　匡史	台湾文学者張我軍の文化活動―翻訳・紹介活動を中心に	*
鄭　セム	米谷　匡史	3・1 独立運動と朝鮮半島のプロテスタント―運動の準備過程であらわれる全国的連帯	*
中川　正太郎	米谷　匡史	日本における移民―変わりゆく時代と社会	*英語

藤 野　　智 洵	米 谷　匡 史	歴史教科書『認識台湾』にみる台湾教育「本土化」と中国の「文化台独」批判	*タイ語

*については、p. 156 以降に卒業論文・卒業研究の要旨を掲載

・備考欄の言語名は所属する専攻語を表す（空欄の場合は日本専攻の学生）

2019 年度卒業論文・卒業研究要旨
Abstracts of B.A. Theses/Projects 2019-2020

新井　みぎわ（アライ　ミギワ）「ポーランド語の非意図的状態構文—語順にみる特徴—」

ポーランド語には、文中で動詞に再帰代名詞 się が伴われる場合がしばしばある。とりわけその中でも、与格補語を含む非人称構文は「非意図的状態構文」とも呼ばれ、これまでに様々な先行研究において言及されてきた。しかし、非意図的状態構文の特徴についてはまだ考察の余地がある。したがって、本稿ではその特徴を掴むことを目的として、コーパスを用いて調査を行い、主に語順という観点から構文の特徴を明らかにする。

市野　沙歩（イチノ　サホ）「現代イギリス英語の HAVE と HAVE got について」

本稿は現代イギリス英語の話し言葉において、所有の HAVE と HAVE got の選択と出現頻度に影響する要因について考察を行った。現代イギリス英語コーパスから HAVE と HAVE got の用例を収集したのち、角田（1991）の提案する所有傾斜基づき分析を行った。調査の結果、分離不可能性が低い所有関係ほど HAVE got の出現頻度は高くなるという傾向が「身体部位」と「衣類」以外の所有関係間に認められた。

岩崎　航（イワサキ　ワタル）「ウルドゥー語における未来表現について」

ウルドゥー語には、形態的に未来を表す「未来形」以外にも、未来の事態を表す表現形式が複数存在する。本稿では、ウルドゥー語における未来表現について、インフォーマント調査を行い、その使い分けを明らかにすることを目指した。具体的には、各未来表現と時間的遠近の関係、及び各未来表現と話者の確信度の関係がどのようになっているのかを調べるため、時の副詞やモダリティの副詞を用いたアンケート調査を実施した。

菊地　香穂（キクチ　カホ）「ウズベク語における相互態を表すとされる接辞 -(i)sh について」

本稿は、ウズベク語における相互態を表すとされる接辞 -(i)sh についての考察である。まず、先行研究に記述のある接辞 -(i)sh の意味をまとめた。そこから、キルギス語における接辞 -(i)sh の機能を参考に、現在のウズベク語における接辞 -(i)sh には、相互の意味も共同の意味もなく、この接辞は単なる複数の標識として使用されている、という仮説を立てた。これを検証するため、インフォーマントに面接調査を行い、仮説を支持する結果を確認した。

下條　実紘（ゲジョウ　ミヒロ）「アラビア語カイロ方言における可能表現」

本稿はアラビア語カイロ方言における可能表現について調査、考察するものである。西尾（1992）が能力表現、可能・許可表現に用いられると述べている 3 つの動詞ʔamkan, ʔidir,

ʕirif を本稿では可能動詞とし、可能動詞の用いられた表現を可能表現とする。小説を用いたコーパス調査と母語話者に対するアンケート調査の 2 つの調査を行なうことで、3 つの可能動詞の使い分けおよび動詞形式による用法の違いを明らかにすることを目的としている。

小林　紗佳（コバヤシ　サヤカ）「現代英語の接尾辞-ish の用法の拡大について」

本稿では、現代英語の接尾辞-ish の用法の拡大について、コーパスを用いて調査を行い、得られたデータから考察を行った。まず-ish で終わる形容詞をコーパスから抽出し、-ish が接続する品詞ごとに分類した。次に各用例が辞書に見出し語として記載されているかを調査し、辞書に記載がない用例に絞って考察を行った。考察の結果、コーパスへの出現回数と辞書記載の有無、-ish の前のハイフンの有無と辞書記載の有無の関係が明らかになった。

齊藤　潤一（サイトウ　ジュンイチ）「ロシア語所有表現UUK構文の選択要因について」

本稿はロシア語所有表現の一形式であるUUK構文がどのような要因から選択されるかについて考察を行った。まず、他の所有表現の選択要因について整理した。そして、ロシア語コーパスからUUK構文の用例を収集し、UUK構文の原型となる所有表現や全く異なる所有表現と比較した。特に、所有者と所有物の関係性、所有者の活動体性に注目し分析した。それにより、UUK構文が、原型となる所有表現とは異なる選択要因を持つことを明らかにできた。

斉藤　弘樹（サイトウ　ヒロキ）「チェコ語名詞と日本語名詞の指小辞の対照研究」

本稿はチェコ語名詞と日本語名詞の指小辞について対照調査を行った。初めに仮調査として日本語原作の小説を用いて調査を行ったが、指小辞を伴う語彙が十分に出現しなかった。したがって本調査では指小辞を伴う語彙が十分に出現すると予測できるチェコ語原作の童話を用いて調査を行った。本調査では多くの指小語のデータを手に入れることができ、チェコ語名詞と日本語名詞の指小辞が持つ特性をそれぞれ図式化することに成功した。

タイ　ジャティエン「マレーシアにおける口語中国語の語気助詞について」

本稿はマレーシアにおける口語中国語の語気助詞について扱うものである。語気助詞とは他の語、句（フレーズ）短文などの後に置き、補助的な働きをし、話し手の心理などを表すものである。本稿はまず、語気助詞は実際にどの程度マレーシア人に用いられているかを明らかにするため、先行研究から例文を抽出し、それを使い日常生活において自然に言えるかどうかについてアンケート調査して分析した。また、マレーシアのドラマ一本のセリフで出ている語気助詞を数えて、出現回数を記録して考察を行った。

田村　絵里香（タムラ　エリカ）「イタリア語における受動態の助動詞選択について」

イタリア語の受動態の助動詞には essere と venire があるが、本稿ではこれら 2 つの助動

詞がどのように使い分けられているかに関する考察を行った。まず、先行研究をもとに様々なタイプの例文を含むアンケートを作成し、イタリア語母語話者を対象に 2 回にわたる調査を行った。これらの調査から、動詞の性質や時制、動作主・被動作主の関係などが、2 つの助動詞の選択に影響を与えていることを確認できた。

張　元宗（チョウ　ゲンソウ）「ポラ語における漢語借用語の声調について」

本稿はポラ語における漢語借用語の声調対応について、他言語経由での間接借用も考慮に入れて考察し、その対応規則を探った。まず、漢語西南官話をはじめとする周辺の言語の声調体系について考察し、次にそれらの言語とポラ語の声調対応を解明した。最後にはこれらの規則を適用し、ポラ語における漢語借用語の声調対応の規則をおおむね解明した。

中村　夏樹（ナカムラ　ナツキ）「ポーランド語の未来表現における動詞分類と体選択の相関」

本稿はポーランド語の未来表現に関して、「動詞の語彙的アスペクト（動詞分類）と、完了体、不完了体の選択に相関関係がある」という仮説の下で、ポーランド語の動詞について動作様態・分類ごとにコーパスで調査し、その結果を簡潔に考察した。それによってポーランド語の動詞には、その分類や様態によって未来表現で取り得る体に相関関係があることが明らかになった。なお動詞の分類については、2 つの先行研究を参考にした。

早坂　圭太（ハヤサカ　ケイタ）「ケチュア語クスコ方言の動詞派生接尾辞 -yku、-rqu について」

本稿ではケチュア語クスコ方言の動詞派生接尾辞 -yku、-rqu の意味を考察した。これらの接尾辞は歴史的にそれぞれ「内側に」「外側に」という方向の意味を持つが、現在では方言により様々な意味を表すという。本稿ではケチュア語クスコ方言モノリンガルにより口述されたテキストを使用したコーパス調査を行い、当該接尾辞についてテンス、アスペクト、モダリティ、様態といった観点から考察を行った。

森本　瑠（モリモト　リュウ）「文語アラビア語1形動詞第2語根の母音選択について」

文語アラビア語 1 形動詞が、未完了形の第 2 語根に後続する母音について a, i, u のどれを選択するかの調査を行った。調査方法としては、インターネット上の辞書「アラジン」のデータを利用して単語を収集し、動詞の自他分類や出現する子音の調音位置などの条件別に a, i, u のどれを選択するかを分類した。その結果により、どのような条件のときに未完了形の第 2 語根に後続する母音で a, i, u のどれを選択するかを明らかにした。

弓削　諒太（ユゲ　リョウタ）「英語とスペイン語の冠詞の対照研究」

本稿は英語とスペイン語の冠詞の対照についての先行研究を概観し、それらを踏まえた

上で英語とスペイン語の冠詞の使用実態の調査を行い、先行研究中の記述の検証を行った。調査では英語とスペイン語それぞれの言語で書かれた小説とその翻訳版を用いて用例を抽出し、冠詞の組み合わせごとに分類して用例数をカウントした。その結果が先行研究中の記述と一致するかを確認し、先行研究で言及されていない場合は分析を行った。

ライ　リエイ「ウズベク語の名詞句従属部における属格の出現／非出現」

本稿はウズベク語の名詞句従属部における属格の出現／非出現について考察を行った。まず日本語の「の」を用いた連体修飾を調査の手がかりとして、[従属部(-属格)　主要部-所属人称接尾辞]という構造が用いられるかどうかを調べた。その中で、属格が現れなくても許容される例が多く見られた。属格の有無がその意味効果に影響しないことが観察された。属格が現れる条件をより明確にすることができた。また、通言語的研究が扱われる文献から、所有構造において最も現れるやすい 6 つの意味関係に関する例文を用いてインフォーマント調査を行った。属格の出現は義務的であるかについて検証した。

青山　紘大（アオヤマ　コウダイ）「明治初年～30 年代の「です」とそれに上接する語の相について」

丁寧語「です」は、早い例では室町時代末期ごろから見られる。この「です」は、江戸末期になり使用者が次第に拡大し、明治初年から 2、30 年代にかけて、用法が拡大していったとされる。しかし、先行研究ではその起源や用法は大筋が明らかにされているものの、用法の発達の詳細については、あまり研究がなされていない。本論文では「です」の用法の発達について、上接する語に着目して明治初年から 30 年代の様相を調査する。

魏　達銘（ギ　タツメイ）「漫画における日本語の命令・依頼表現の実態について」

日本語話者は話し手と聞き手の間柄、上下関係、発話の場、距離などといった発話状況によって、言葉の内容や表現を変えていく。そして、コミュニケーションで最も多用されている命令・依頼表現がそれを鮮明に反映している。一口に言っても、命令・依頼表現は媒体によっては異なる表現形式が存在する。漫画はその媒体の一つとして数えられる。本論文は、漫画の中に出現する命令・依頼表現をどのようにしてわかりやすく見分けして分類できるか、そして漫画の中に出現するどの種類の命令・依頼表現の出現頻度が高いのか、その傾向を示す。

鄭　成南（テイ　セイナン）「朝鮮語母語話者の条件表現「と」の使用実態について −日本在住の朝鮮語母語話者を中心に−」

本論文では日本語と朝鮮語の条件表現について紹介した上で、日本在住の朝鮮語母語話者を対象としたアンケート調査の具体的なデータを基に、日本語母語話者の使用実態との

比較を通じて、朝鮮語母語話者の「と」の使用実態について考察していく。また、本論文の目的は、朝鮮語母語話者の「と」の使用実態を明らかにし、日本語母語話者の使用実態との異同点を探り、朝鮮語母語話者が日本語の条件表現「と」に対する理解を少しでも深められるように手助けすることである。

田　嘉誠（デン　カセイ）「副詞をとりたてる場合の助詞「は」の機能について」

日本語の助詞「は」については、これまで研究されてきたようにトピックマーカーとしての機能、すなわち「主題を立てる」という機能を持つことがわかっている。一方助詞「が」については主題を立てることができず、その点において助詞「は」の機能に異する。これらはいずれも助詞「は・が」に体言類が接続した場合の話である。そこで助詞「は」には接続でき、助詞「が」に接続できないものとして副詞の存在をとりあげ、「おそらくは」のような「副詞(は)」の形における助詞「は」の機能を考察する。

中野　僚満（ナカノ　リョウマ）「今後の日本における漢字使用」

当初、便利だと思っていた漢字に対する、否定的な意見があることを知ったことから、漢字が今後の日本においても使用され続けるかどうかを予測した。その方法として、他の漢字文化圏(ベトナム、朝鮮、中国)における漢字の受容と放棄に関する歴史をまとめ、それぞれの一般項を抽出し、アンケートにより日本においてもそれらの項が当てはまるのかを調べた上で、漢字は日本においては無くなる可能性は少ないという結論に至った。

南　菲　（ナン　ヒ）「日本映画のタイトルの中国語訳語について」

20 世紀 70 年代日中の国交正常化に伴って、両国の一般市民の間の文化交流活動も頻繁に行われるようになった。特に 20 世紀 80 年代の中国改革開放の時代に入ると、中国の各地で日本映画ブームが起こり、代表的な映画俳優の高倉健や、山口百惠が多くの中国人の心がつかんだ。日本映画は、両国交流の橋として中国の一般民衆の日本の言語、文化に対する理解力の向上に大きな役割を果たしたと言える。本論文は、20 世紀後半から、21 世紀の今日まで中国で上映された日本映画のタイトルの中国語訳語について分析し、語構成の特徴及び訳語を作る際の語形成規則を検討するものである。

及川　結（オイカワ　ユイ）「ロシア語接頭辞付動詞の日本語訳出方法の研究
−接頭辞 при-/pri-・y-/u-が付いた場合−」

本稿はロシア語の接頭辞及びそれが付加された動詞を扱い、日本語への訳出方法を検討した研究である。２種類の接頭辞（при-/pri-と y-/u-）が持つ複数の意味を体系的に整理すると共に、日本語訳データを集計することで、ロシア語接頭辞付動詞の日本語訳出パターンを分析・生成することを試みた。また日本語ネイティブであるロシア語学習者に向けて、

接頭辞理解及び習得に効果的な学習項目を提示した。

呉　少晗（ゴ　ショウカン）「中国語補語“－上”の新たな分類視角：統語的能格性の有無に基づいて」

中国語の補語“－上”は、学習者にも習得がむずかしいが、本論文では、“V－上”の各意味用法から見られるアライメント的な差異に基づいて、統語的能格性の有無が、文法化の度合い・言語類型論・歴史言語学の視点から説明しうることを示した。方向義は文法化の度合いが低いため、動詞と補語の結合度が低く、統語上も異なる性格を見せる。中国語は類型的に両面性を有する言語で、対格型・能格型アラインメントを両方とも備え、文法化の進んだ意味用法が能格型アラインメントを示すのは、祖語から継承した性格とも考えられることを論じた。

小松原　千明（コマツバラ　チアキ）　「日本語母語話者の中国語結果補語「到」の誤用と習得について」

本論文では、動作動詞を到達動詞に変える文法化したアスペクト辞〈-到〉について、〈-到〉の性質を明らかにした上で、東京外国語大学中国語専攻上級学習者による誤用タグ付き中国語学習者コーパス（東京外国語大学国際日本研究センターで公開）http://ngc2068.tufs.ac.jp/corpus/ を用いて、〈-到〉の誤用を調査した。結果として、東京外国語大学日本語母語話者による〈-到〉の脱落による誤用と、马婷婷（2013）による HSK コーパスにおける様々な母語の中国語学習者の〈-到〉の誤用を比較して、日本語母語話者は、〈-到〉の脱落の傾向がより高いことを立証し、日本語母語話者向けの〈-到〉を含む結果補語の教授法が必要であることを論じた。

霜鳥　加奈（シモトリ　カナ）
「ICT を用いた高大連携オンライン英会話プロジェクトにみる CEFR-J の各レベルとの対照―各映像データと CEFR-J から―」

徳島県城東高校・東京外国語大学・産経ヒューマンラーニングによる高大産学連携の英語スピーキングプロジェクトで、一人の高校生を 1 年次 11 月から 2 年次 5 月までの 7 回の産出に基づき、縦断的にその成長を追跡した。映像データから「やりとり」部分の文字化を行い、発話量、間投詞、質問や言い直しの回数、1 単語での回答数、表現の複雑化の視点から分析し、CEFR-J「やりとり」評価に基づき、A1.1 から A2.1 レベルへ成長していることを実証した。

高崎　友希（タカサキ　ユウキ）「中国語結果補語の習得　―日本語母語学習者コーパスに基づく分析―」

東京外国語大学中国語専攻上級学習者による誤用タグ付き中国語学習者コーパス（東京

外国語大学国際日本研究センターで公開）http://ngc2068.tufs.ac.jp/corpus/を用いて、中国語結果補語の誤用特徴に関して、中国語学的考察に加え、日中語動詞の語彙アスペクト・結果を表す表現を比較した。さらに、効果的な教授法として、「結果構文の否定は、“不”ではなく“没有”であること」、「中国語の動作動詞には結果義が含意されず、結果補語をつけて初めて到達動詞になること」を日本語との対照で教えることを提案した。

陳　佳惠（チン　カエ）「日本語の「ている」表現から見るリトアニア語の対応表現」

日本語ではスル形式とシテイル形式の区別、リトアニア語では動詞アスペクトとテンスの組み合わせがアスペクトの二項対立を成立させている。日本語とリトアニア語のアスペクトについてそれぞれまとめ、村上春樹著『風の歌を聴け』の日本語本文の中から、「ている」「ていた」が使用されている表現とそれに対応するリトアニア語表現を全て抜き出し、日本語のシテイル形式がリトアニア語にどのように翻訳されているのかを調査した。

山本　結菜（ヤマモト　ユウナ）「ICT による高校生英語スピーキングの研究 ー認知的・非認知的能力の成長ー」

東京外国語大学望月圭子研究室を拠点に、長野県上田高校・徳島県城東高校と連携して行っている産学連携の ICT による英語スピーキング遠隔教育プロジェクト（2018 年 11 月-2020 年 7 月）の効果検証として、高校生の「認知的能力」（英語スピーキング能力）と「非認知的能力」（学びに向かう力）に与える縦断的な成長を、一人の生徒を一年間に渡り追跡調査をした。「Pieneman の習得段階」を用いた分析により、助動詞、動詞の過去形、不定詞、仮定法の習得過程、非認知能力（生徒自身の学びに向かう姿勢、モチベーション）の向上を検証した。

辻内　康輔（ツジウチ　コウスケ）「中学校数学科教科書リライト教材の作成」

本研究は中学校 3 年生数学のリライト教材の作成である。日本語能力検定 N3 を基準に教材のリライトを行った。教材作成によって、外国人生徒の学習を支援し、学校での教育との橋渡しを目的にする。また外国人生徒の高校進学や学習支援の現状、入試制度についてもまとめ、そこにある課題について指摘している。

長谷川　聡美（ハセガワ　サトミ）「日本語母語話者と日本語学習者のぼかし表現「とか」の使用実態分析」

日本語母語話者と日本語学習者の「とか」使用実態を会話コーパスを用いて分析し、比較した。その結果、母語話者がぼかし用法を圧倒的に多く使用するのに対し、学習者は従来の用法である並列の用法で「とか」を使用することが多いということが分かった。また、学習者の分析をレベル別で見ると、学習者のレベルが上がるにつれて「とか」の使用場面が増え、従来の用法だけでなくぼかし用法も使えるようになるという傾向がみられた。

近藤　悦子（コンドウ　エツコ）「Vocabulary for Intermediate Learners of Japanese: An Analysis of Vocabulary in Japanese Language Textbooks」

本稿では、中級学習者やその教師たちの語彙学習の設計を助けることを目的に、中級日本語学習者向け教科書の語彙を分析した。分析対象は『みんなの日本語中級』と『まるごと　日本のことばと文化　中級』の２つのシリーズの教科書である。『みんなの日本語中級』では漢語や汎用性の高い語が目立ち、『まるごと　日本のことばと文化　中級』では外来語や暮らし・文化に関わるより具体的な語が多く使用されていることが明らかになった。

直井　悠香（ナオイ　ハルカ）「多言語学習者の日本語学習ビリーフ：中国語を母語とする多言語学習者の事例から」

グローバル化が進む現代では複数の言語を習得する学習者は珍しくない。本稿では、そのような多言語学習者の中でも中国語を母語とし英語を習得した日本語学習者に焦点を当て、そのビリーフを調査した。その結果、彼らは教室でのコミュニケーション活動を好み、日本文化への興味が主な学習動機になっていることが明らかになった。今後は、以上の傾向を踏まえた日本語教育を行うことが重要だと考えられる。

原口　夏海（ハラグチ　ナツミ）「小学校での多義語の指導法提案 ―多義語の導入としての‘Have’―」

本論文では、2020 年度から改定が全面実施される小学校の外国語において、英語の多義語指導の方法の提案を行う。まず、多義語と多義性の定義を行い、これまでの多義語指導について先行研究をまとめている。次に、学習指導要領に沿った英語教育はどのようにあるべきかを考察し、プロジェクト型活動の特徴を踏まえ、プロジェクト型活動を用いた多義語の指導について具体的な提案を行う。最後に、結論と限界点を示しまとめとする。

春山　知里（ハルヤマ　チサト）「フィンランド人日本語学習者の学習動機―変化の過程その要因について―」

本稿では、フィンランド人日本語学習者２名を対象に実施したライフストーリー・インタビューのデータをもとに、調査対象者の日本語学習動機の変化の過程とその背後にある要因について分析・考察を行った。フィンランドでは日本語教育が盛んに行われておらず、フィンランド人を対象とする日本語教育の研究も少ないが、今回の調査では、フィンランドの日本語教育と調査対象者の学習動機の変化の関係が見られた。

林 アラン 正人（ハヤシ アラン マサト）「ポルトガル語を母語とする日本語学習者の日本語の分節音とアクセントの誤用に関する研究」

ブラジル人の来日と滞在の増加に伴い、ポルトガル語を母語とする日本語学習者の学習過程で見られる誤用を知っておくことが今後重要となるが、現在、ポルトガル語母語話者

の研究は十分ではないため、今回の調査では日本語の分節音とアクセントにみられる誤用を被験者に単語を音読させ、その自然度合いを母語話者に評価してもらうことで、そこから誤用と感じられるものを抽出し、母語の干渉という点において考察を行っている。

石井　温子（イシイ　アツコ）「水底に弧悲て 細川忠興」

安土桃山時代の武将、細川忠興の青年期を描いた歴史小説です。「天下一の短気者」と称されるほどに苛烈な武人としての性質を持つ一方、知識人、文化人としても名高く、戦乱の世における振る舞い方を極めて冷静に判断していたと思われるこの人物はどのような人だったのか、彼が幼少期から青年期にかけて経験したであろう史実と合わせ解釈しようと試みた作品です。また、創作行為を通して古語の「弧悲」「かなし」について、筆者の感じる現代における「恋」「愛しい」とのニュアンスの違いを表現しようと挑戦しました。

久保　理紗子（クボ　リサコ）「福永武彦『忘却の河』と『死の島』における小説形式」

福永武彦は、1918 年に生まれ、1979 年に没した小説家である。彼の作品の中でも特徴的な構成の長編小説『忘却の河』(1964)『死の島』(1971)の小説形式について考察し、形式を用いた背景まで踏み込んだ。その結果、両作品とも意識の流れに沿った時間が展開される点、無意志的記憶とそれによる発見等の特徴が見られた。これはマルセル・プルーストが『失われた時を求めて』の主題としたことと類似しており、その受容の可能性についても考察を行なった。

シム　ハヌリ「あなたのカケラ」

スヨン、葉月、リリは大学で出会った仲良しの 3 人組、それぞれ個人としての時間と一緒に過す時間が混じり交差する大学 4 年を過ごす。出会いから 4 年間、子供と大人の間のどこか曖昧な位置で関係を築いていく中、それぞれの時間の一日を切り取る。あなたと私の時間、私がみたあなたの一部、あなたが見る私の一部などの話を通じて、他人を知るという事、知ってもらう事とは何かなど問いながら振り返る成長物語。

鈴木　陽子（スズキ　ヨウコ）「詩集・四季」

本卒業研究は日本の四季を大きなテーマとし春夏秋冬の四章で構成された自由詩である。日本人に親しみのある七五調のリズムや韻などを意識し作成した。日常を切り取ったものから植物等の人間ではないものになりきって編んだ詩集である。

田中　達也（タナカ　タツヤ）「詩集・いつかの君へ」

卒業研究として詩の制作を行った。詩を書くことによって、今まで学んできたことやその中で考えたことを表現したいと考えた。詩の制作において、「集団の価値観に沿わないものを排除しようとすることへの違和感」というテーマから出発して、自分の意思を持つこ

とや、集団の息苦しさなどにも目を向けて作品を書いた。

星川　日向子（ホシカワ　ヒナコ）「クリップ」

本卒業研究は、言語表現や芸術について学び、考えてきたことの集大成として、短歌の制作に取り組んだものである。日常生活のきらめきとその中で時折遭遇する詩的瞬間を、短歌というかたちで表現することを目的とした。主に、大学４年間の生活や、この期間に訪れた場所、経験、関わってきた人々、それらから想起したイメージなどをもとに、全 70 首・７章からなる一つの歌集とした。全体の構成は、大学入学から卒業までを時系列で追ったものとなっている。

土田　杏奈（ツチダ　アンナ）「『万葉集』の恋歌における諸相について」

恋歌には一般的に類型化された表現がよく使われるが、『万葉集』の恋歌は内容や表現が実に多種多様であり、様々な事柄が様々に詠まれている点が特徴的である。また、同じ事柄を詠んだ歌でもその内容や表現はそれぞれ異なっており、歌からは当時の人々の素直で豊かな表現力を窺い知ることができる。本稿では『万葉集』の恋歌に詠まれている様々な事柄の中から、特に興味深いと感じたものについて、それぞれの諸相を考察する。

谷川　蘭（タニガワ　ラン）「源実朝『金槐和歌集』の研究―編纂の目的とその過程―」

歌人や文学者により高く評価され、「孤独な青年歌人」「北条の傀儡将軍」と言われてきた実朝。本稿では特に歴史学の研究を新たに参照することで、実朝の真の姿を捉えることを目指した。後鳥羽院や北条氏との関係も先入観を取り払って見直し、実朝は意欲的な為政者だったこと、実朝にとって和歌と政治とは矛盾しなかったことを提示した。その上で、金槐和歌集はどのような意図、家庭を持って編纂されたのかを考察した。

榎本　万澄（エノモト　マスミ）「上尾地域の紅花栽培に対する商人指導の重要性
−菜種栽培との比較を通して−」

江戸時代後期、現在の埼玉県上尾市にあたる地域では、紅花栽培が重要な産業だった。やせ地だったこの地において、紅花が主力産業となった背景に、商人による管理・指導があったことはすでに先行研究で明らかにされている。しかし商人の存在がどの程度重要だったのかについては漠然としている。この論文では、同じく上尾地域で商品作物として導入されたが、産業としては成長しなかった菜種と、紅花産業を比較することによって、商人指導の重要性について考察しようとするものである。

切明　優里香（キリアキ　ユリカ）「土豪と地域社会―信濃国更級郡大塚村町田家を事例として―」

本論文では村に残った武士である信濃国更級郡大塚村町田家の帰農後について、貞享元

年（1684）に書かれた町田儀右衛門の家訓を中心に帰農後の系譜、町田家自身の身分意識と思想、そして村内での立ち位置に着目して考察した。町田家は大塚村東組において帰農後も武士的な思考や立場を残し、村内においても同様に格式が高い存在であったことを論じた。

小池　晴華（コイケ　ハルカ）「大正・昭和期における茨城県南部地域の茶生産―北相馬取手市下高井町広瀬家を素材として」

一茶園における茶生産の変遷をたどり時代の変化との関係を探ることを目的に、茨城県北相馬郡取手市に残された広瀬誠家文書を基に大正 5 年(1916)から昭和 35 年(1960)の戦後期までの茶生産の記録を研究した。論文では、広瀬家の茶園については、大正期から昭和期にかけて一定の規模を保ったまま茶の生産量が減少したことが明らかになった。論文では分析の結果から広瀬家の茶園での茶生産は副業的側面が強かったために、戦争や天候不順にあまり左右されることなく茶の生産が行われたと推測した。

小島　梨未（コジマ　リミ）「千宗旦一畳半茶室「不審庵」―今はなき姿の解明と復元―」

本研究では、千利休の孫の千宗旦が江戸時代に建設し、今は存在しない一畳半茶室「不審庵」の当時の姿の推測とその復元模型の制作を行った。史料や先行研究に基づき、茶室の外観、建築材料の具体的な種類、及び茶室内部の様子のうち、未だ先行研究で明らかにされていない箇所を推測した（具体的には、力竹、畳、炉、外壁脚部、刀掛、腰張、釣棚、横竹、柱、色付けの各仕様）。なお模型には主にスチレンボードを用い、着色を施した。

杉本　有輝（スギモト　ユウキ）「八田嘉右衛門の経済活動―松代藩との関係に注目して―」

本稿では松代藩の御用商人として活躍した伊勢町八田家がどのような経済活動を行っていたのか、長野県史などの史料や、当時の八田家の文書を用いて明らかにした。特に八田家の五代目当主であった八田嘉右衛門の経済活動や家政改革、彼の遺した家訓や遺書を中心に取り扱い、彼がそれまでの八田家の経営方針についてどう考えており、どのような家政改革を行ったのか明らかにした。

重松　朝妃（シゲマツ　アサヒ）「明治維新期における四国遍路の停滞に関する一考察」

四国遍路者は寛保年間から増加し、文化・文政期には一次最盛期となった。しかし明治維新期に入ると遍路者は大幅に減少、停滞する。その最大の要因は明治維新後の治安の悪化であるが、本稿では明治政府による遍路排斥を中心に検討する。その背景には、神仏分離令による札所寺院の衰退、回国巡礼者の取り締まりがあった。その後、警察制度や、遍路を適切に管理する制度が発達し、明治中期にかけて再び遍路者数が回復した。

谷　始央理（タニ シオリ）「一田庄七郎の籠細工興行からみる近世後期の見世物の興隆と魅力」

江戸の庶民の娯楽であった見世物には、細工見世物、様々な曲芸、舶来動物などがあり、なかでも細工は全体の半分を占め、中心的存在だった。文政 2 年の一田庄七郎の籠細工興行は大ヒットを記録し、細工見世物ブームが起きた。その斬新で遊び心ある作品性と、仏教行事との融合といった商売戦略が成功の要因であったと結論づけた。これを一田からの教えとし、現代のエンターテインメントに伝承され、新たな文化的進歩がなされることを期待する。

水谷　泰士（ミズタニ　タイシ）「江戸の美意識と悪意―山東京伝の黄表紙を素材として―」

江戸時代後期に流行した黄表紙に見られる悪口や悪意に着目し、草双紙から伺える当時の美意識を考察した。特に、黄表紙の発展に大きく寄与した山東京伝の作品『手前勝手御存商売物』『江戸生艶気樺焼』『孔子縞于時藍染』を取り上げた。それぞれの作品から悪口を抜き出して比較し、共通する悪意から美意識を探った。江戸時代の美意識であるとされる「通」や「粋」と草双紙の悪意の共通性を論じた。

三井　理紗子（ミツイ　リサコ）「女性の美徳―福沢諭吉の女性観を中心に―」

本論文では、各時代の日本において女性がどう位置づけられていたのか、また女性の役割として何が求められたのか、当時使われていた女訓書や学校の規則の史料をもとに、女性の美徳の成立とその変遷を考察する。第一章では、江戸時代の人たちが抱く女性観、第二章では、福沢諭吉の「女大学評論・新女大学」を中心に、福沢の持つ女性観、そして第三章では、明治時代に理想とされていた女性像を明らかにする。

吉田　瀬奈（ヨシダ　セナ）「絵双六に見る女性像―史料としての双六の有用性の検討」

江戸時代から遊ばれる絵双六には庶民の姿が描かれたものも多く、当時の世相を反映しているとされ、当時の生活の様子を検証できる歴史的な史料としての価値を見出されている。そういった背景から、この論文では女性の教訓や女性の出世、成長を題材とした女双六の「上がり」に描かれた女性は、当時の理想像が反映されているのではないかと考え、時代によって女性の理想像の変遷を比較するのに有用な史料になりうるのではないかと考え、検証した。

久保　志哉（クボ　ユキヤ）「賢母良妻主義にみる植民地期朝鮮のジェンダー規範―女子教育の要求とその限界」

本論文は賢母良妻を切り口に、植民地期朝鮮における女子教育の要求の限界について考察するものである。当時女子教育を求めた主張は、必ずしも男女の本質的平等を求めたわけではなかった。賢母良妻という規範のもと、「女性は家庭で子供の教育をする」という「責

務」を全うすべく提唱されたものが多かった。つまり、「男は外で仕事、女は内で家事・育児」というジェンダー規範を必ずしも脱するものではなかったという限界があった。

黄　嵐東（コウ　ラントウ）「台湾文学者張我軍の文化活動―翻訳・紹介活動を中心に」

台湾新文学運動の先駆者として知られている張我軍は、作家であり、日本語教育者であり、翻訳家でもある。彼は 1926 年から約 20 年間北京に滞在し、当時の日中間交流に影響を与えた人物である。張我軍の文学活動は、時期によって内容が異なる。本論文では、張我軍の文学活動、主に翻訳・紹介活動を、三つの時期（台湾滞在、北京陥落前、北京陥落後）に分けて分析し、特殊な時代背景を踏まえ、彼の文学活動はどのような意味を持っているのかを考察した。

鄭　セム（ジョン　セム）「3・1 独立運動と朝鮮半島のプロテスタント―運動の準備過程であらわれる全国的連帯」

100 年前、3・1 独立運動当時の朝鮮プロテスタントは、全国人口の 1.5%の少数宗教であったが、3・1 独立運動の準備段階から民衆闘争までの全過程で主導的な役割を担当した。外国人宣教師の宣教会と共に、独自な全国連絡網の構築などで成し遂げたプロテスタント内の連帯、そして天道教、仏教との宗教間の連帯は、植民地朝鮮の最大の民族運動といわれる 3・1 独立運動の原動力となり、後日の臨時政府の樹立につながるきっかけとなった。

中川　正太郎（ナカガワ　ショウタロウ）「日本における移民―変わりゆく時代と社会」

かねてから、日本政府は国内の人口過剰を理由として、「単純労働者」については「慎重に対応する」とし、実質受け入れないという姿勢を取ってきた。しかし、2019 年 4 月 1 日の法改正によって、単純労働者の受け入れが可能となり、今後日本への移民数が大幅に増加することが見込まれる。本論では、移民送出受入国としての日本の歴史を振り返り、現在の状況下において、日本がどのような施策を取るべきか考察する。

藤野　智洵（フジノ　トモアキ）「歴史教科書『認識台湾』にみる台湾教育「本土化」と中国の「文化台独」批判」

本論文は「脱『中国化』」・「本土化」の動きを見せる台湾教育界と中国によるその批判をテーマとし、新教科書『認識台湾』が台湾教育界に登場するまでの過程において、かつてそうでなかったものが、いかにして「本土化」「台湾化」の方向へ舵を切るようになったのかを明らかにする。また同時に、過度に政治化した『認識台湾』をめぐる両岸関係に焦点を当て、中国がなぜ批判を続けるのか、そして、緊迫した両岸関係下で、中国が求める台湾の教育の在り方がいかなるものなのかも解明していく試みである。

編集後記
Editor’s Note

『日本研究教育年報』第 24 号をお届けします。大変残念なことですが、これが最後の号となります。この雑誌が担っていた大学院生や修了・卒業生の投稿雑誌としての役割は、新たに大学院国際日本学研究院から発刊される論集である『東京外国語大学国際日本学研究』に引き継がれることになります。より大きくなった刊行の母体の元で、日本語・日本文化への研究を深める場として一層発展することが期待されます。

終刊号となった本年度の『日本研究教育年報』には、6 本の研究論文と 1 本の実践報告のほかに、早津恵美子教授、旧日本課程の卒業生である蕭幸君さんのエッセイを掲載することができました。今年 3 月で定年退職される早津先生は本学で 30 年にわたって教鞭を執られて日本語学研究を牽引されるとともに、国際日本学研究院の院長としての重責も担われました。また現在台湾東海大学で教壇に立たれている蕭さんも、長く本学で修学され、谷崎潤一郎研究で博士号を取られた方です。終刊号にふさわしい方々からの玉稿をいただくことができたのは嬉しいかぎりです。

なお今後も『東京外国語大学国際日本学研究』に論文などを投稿していただければ幸いです。今年度中にプレ創刊号が発刊され、来年度の創刊号から論文を募集します。本誌と同様に電子出版となり、同じレポジトリーに登録されています。投稿規定については、プレ創刊号に載せられた規定をご覧下さい。ふるって力作をお寄せください。

2020 年 3 月　　『日本研究教育年報』編集委員会

柴田勝二（編集長　日本近代文学）
望月圭子（日英中国語対照言語学）
海野多枝（日本語教育学）
米谷匡史（日本思想史）
ラージ・ラキ・セン（日本近代文学）